

バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ氏蒐集文書調査報告

―『豊後切支丹史料』とその周辺―

松 井 洋 子

はじめに

サレジオ会のイタリア人神父マリオ・マレガ氏(一九〇二―一九七八)は、イタリアにおける日本研究の草分けの一人であり、『古事記』のイタリア語訳や、『忠臣蔵』などの物語の研究で知られる。⁽¹⁾ また、マリオ・マレガ編著『豊後切支丹史料』正編・続編の二冊の史料集は、同地域のキリシタン研究にとって不可欠の基礎史料として今日に至るまで用いられている。この史料集に収録された史料の原本の所在は、長く不明とされてきたが、二〇一一年、実際に史料を探索していたサレジオ会の神父溝部脩氏のもとに、バチカン図書館から照会があり、同館の倉庫で発見された大量の日本語文書が、『豊後切支丹史料』の原文書を含む、マレガ氏蒐集史料であることが判明した。溝部氏から連絡を受けた大分県教育委員会では、当時先哲史料館館長であった平井義人氏等が二〇一二年二月にバチカン図書館を訪問し、現物を確認した。

日本語史料であることから、日本側に調査への協力が求められたが、一万点以上の海外所在文書の整理は、資金と人力を必要とする仕事であり、一機関が簡単に引き受けられるものではない。多くの研究者や機関に声をかけ、この史料の重要性を説く関係者の粘り強い努力により、諸

機関の研究者の協議が重ねられ、最終的には、人間文化研究機構が中心となり、バチカン図書館と協定を締結し、大分県立先哲史料館・東京大学史料編纂所が協力機関として参加するかたちで、「マレガ・プロジェクト」が開始された。⁽⁴⁾ 史料編纂所では、「日本史料の研究資源化」を課題とする共同利用・共同研究拠点として、このマレガ氏蒐集文書を対象とする研究を、海外史料領域の特定共同研究に位置付けている。⁽⁵⁾ 本稿は、特定共同研究の活動にも触れつつ、二〇一六年七月現在までに行われた同プロジェクトによる概要調査の状況と、判明した史料の概況を紹介することを目的とする。⁽⁶⁾

一 マレガ・プロジェクトによる調査

(1) プロジェクトの目的

マレガ・プロジェクトは、(a) 文書群の概要調査の実施、(b) バチカン図書館での保存管理と公開体制整備への協力、(c) 文書全点の目録作成、(d) 画像データベースのウェブ公開、(e) マレガ神父・文書群についての研究を通じた学術情報基盤の整備等を目的とする。⁽⁷⁾

(2) 文書群の現況と概要調査

発見されたマレガ氏蒐集文書群は、一九六四年に整理されたという二



写真1 調査開始前の保管状況

一袋の状況を維持する形でA1～A21と番号付けされ、無酸素袋に封入された(写真1)。数字の順番は原秩序に聞わらない便宜的なものである。⁽⁸⁾

概要調査においては、①現状記録写真を撮りつつ梱包を解体し、②史料の構造の復元が可能のように、包み紙や紐、同封のメモなども含めた現状の階層を反映した史料番号を付与し、③番号を記入した封筒に収納する。④最小単位の番号ごとに史料の形態、言語、大きさ、虫食いや破れなどの保存の状態、番号を初めとするメモの有無など、史料の状態を記録する調査票を記入する。⑤バチカン図書館の職員が、同館の方式のつとより、史料そのものに鉛筆書きで番号を付け、登録簿に記載し、ケースに保管する。という手順をとった。

その後、同館によって、同じ建物の写場において、大型スキャナーを用いて同館の基準に基づくデジタル化作業が行われる。画像には撮影段階で、概要調査で決めた番号、

その中の何枚目の画像にあたるかなどの情報が付与される。日本側ではデジタル画像に基づ

表 各袋の概況

袋	件数	マレガ番号
A1	627	○
A2	250	○
A3	823	×
A4	909	×
A5	218	○
A6	369	○
A7	721	○
A8	440	○
A9	1,008	△ (一部無)
A10	484	○
A11	466	○
A12	1,041	△ (袋毎)
A13	610	×
A14	659	○
A15	933	△ (袋毎)
A16	583	○
A17	290	○
A18	25	書籍 別?
A19	1,014	×
A20	1,000	×
A21	494	× (一点のみ)

き、調査票の情報を拡充する形で一点毎の史料目録を作成することになる。これまでに、二〇一三年九月一六日～二〇日(参加者九名)、二〇一四年九月八日～二六日(二〇名)、二〇一五年二月九日～一三日(二〇名)、二〇一五年九月六日～一八日(二六名)、二〇一六年二月八日～二日(一三名)の日程で調査が行われ、二〇一五年度末までに、A1～19とA21の概要調査、A1～10までのデジタル画像撮影が終わっている。二〇一六年度には概要調査が完了し、A16までを撮影、二〇一七年度には撮影を完了し、二〇一八年度には目録作成が終了する予定である。

二 マレガ氏蒐集文書の概要

(1) 二一の袋の中身

概要調査により確認された、各袋に含まれる史料の件数、マレガ氏の付与した番号の有無を表に示した。ここでの件数は、近世文書のみでなく、マレガ氏によるメモ、分類のための包み紙等まで含めた、ものとしての点数であり、それぞれに個別番号が付される最小単位となる。実際の文書数は、今後の一点毎目録の作成を経て明らかになるが、包紙のみ、断簡等も多く含まれており、数え方については検討が必要である。

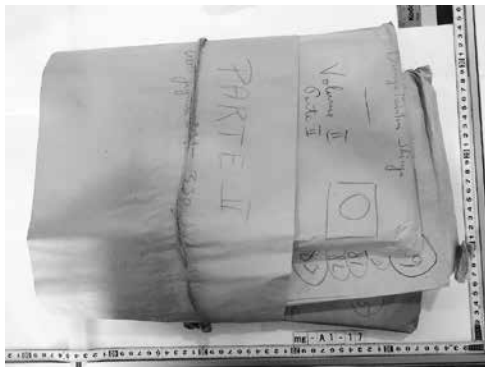


写真2 マレガ氏の整理した封筒の束 (A1)

二一の袋には、少なくとも、三つの段階のものがあつた。

①刊行された『豊後切支丹史料』（正・続）への収録史料に関わるもの
②マレガ氏によるスタンプや整理番号が記され、ある程度の仕分けがされているもの。整理の程度は、単に番号が付いているだけのものから、内容等に関わるイタリア語のメモが一点毎に付いているものまで、さまざまである。後述するように、マレガ氏は入手した史料一点一点に、通し番号（以下「マレガ番号」）を付与しようとしていた。番号は朱色のスタンプの枠の中に書かれているものが多い。¹⁰⁾

③マレガ氏が入手したが、十分に整理・研究するに至らなかったもの。番号は付されないか、藩庁で用いられていたとみられる袋単位に付されている場合もある。ただし、送付及びその後の保存の過程で、本来は別の段階にあつた複数のかたまりが一括された可能性もあり、一つの袋が必ずしも一つの整理段階のものであるとは限らない。

以下に、ごく簡略ながら各袋について、現在までに筆者が得られた情報を整理しておく。

(2) 『豊後切支丹史料』（正・続）に収載するために抜き出した史料

A1 この袋には、『豊後切支丹史料』（正・続）の、マレガ氏による記入のある手沢本(A11・A12)¹¹⁾に加え、『続編』に収載された史料が、章立てごとの記号と、順番を示す番号、マレガ番号を記された茶色の封

筒に入れたり紙に挟んで整理されていた（写真2）。『続編』の刊本には各引用史料のマレガ番号も表記されており、そのほとんどがこの袋に入っていた。A14からA116が同書第一部「豊後切支丹囚人について」、A117が第二部「本人・本人同前・転本人」、A118が第三部「踏絵」、A118が第四部「届書」に対応する。（A1内の）以下の番号は、袋を開梱する際現状記録のため端から付与したものであり、マレガ氏が意図した順序を反映していない。）多くの封筒には、マレガ氏によるイタリア語とローマ字のメモが記載された紙片が同封され、一部には翻刻も含まれていた。メモの中には、読み上げ、筆記、校訂に協力した人々の名前が出てくるものもある。また刊本のページ数を示す書き込みがあり、『続編』出版後にも原文書の照合あるいは再整理が行なわれたとみられる。

A120には、四九九までの通し番号を付された『続編』の原稿一式が入っていた。原稿には、書き込み及び貼紙の形で多数の修正が加えられている一方、活字の号数や写真の位置、割り付けの指示も記されている。『続編』冒頭に付された『続編』の正誤表のもとになったと思われるノートもあつた。

A2 三つの最近の文書箱に入った『正編』所収史料と、白い紙包みからなる。

『正編』の所収史料については、A1と同様に、封筒にマレガ番号と掲載順を示す番号が付されている。封筒には、メモの紙片や翻刻、訂正すべき点を知らせる郷土史家からの葉書等が同封されているものもあつた。¹²⁾（A1に同梱された『正編』の手沢本には、同書では印刷されなかった各引用史料のマレガ番号が色鉛筆で記され、また各引用史料に西暦やイタリア語のメモが書き込まれている。）『正編』全体の出版のための原稿はこの袋には入っていない。

白い包みの中には、「古事記」の影印復刻版に加え、「原城記事」（上

中下)、「有馬陣記集」、「島原天草日記」、「邪宗門之儀に付内密申上之書付」などの写本が一括されていた。「正編」との直接の関係は不明であるが、キリシタンと関係の深い島原の乱についての色々な写本を集めている点は興味深い。

A1・A2に括られている文書のうちには、内容の重複などの理由で、『正編』『続編』に収録されなかった史料も若干存在する。イタリア語のメモの中には「転びは一人もない。出版には使えない。」⁽¹³⁾などキリシタンとその後裔に関心を集中させるマレガ氏の編纂方針がうかがえる記述も見られる。

史料編纂所の特定共同研究では、まず『豊後切支丹史料』正編・続編の原史料を確定し、大半の史料についてその原文書との照合を行なった。引用史料の中には、複数の史料から殉教者を抽出する加工も多く見られる。今後は、史料の原型を反映した翻刻を示すとともに、入手時のかたまりのある程度残すと推測されるマレガ番号の各所から抽出された史料の、もとの前後関係を確認し、史料群全体の中での位置づけを行なっていくきたい。

(3) 未刊行の史料

A3・A4 二つともほぼ同じ洋服店の箱を利用している(写真3)。マレガ氏による番号付与、個別の史料についてのメモ等はみられない。

宗門改の実施、類族の死亡・出生・移動、剃髪等について白杵藩の宗門方に報告した文書が中心である。類似の文書が束ねられており、宗門方の蔵などに収納されていたものかと思われる。中には一部、虫損・水濡れなどによって圧着してしまい、開くことが困難なものも見られた。

A5 簿冊のくくりや一紙類の束が新聞に包まれていた。家中の支配単位の組ごとに、組に属する士分の家の家内男女人数を書上げた「家内人数之覚」、各村組の庄屋から出された「人高御帳」などが含まれるが、



写真3 A3の保存状況とその箱

りしたん(宗門)御改に付起請文前書之事」を村ごとにまとめたものである。文言はほぼ共通で、家内全員の印又は略印と血判、檀那寺の寺請文言の記入と花押が見られる。⁽¹⁴⁾

A7 一紙類の束九括。内容は類族の縁付、養子縁組、引越・所替、出家・剃髪、他出等の移動についての宗門方への報告からなる。一点毎に連続したマレガ番号が付されており、マレガ氏が一点ずつ開いた痕跡が見られるが、束ごとの番号記載以外に、イタリア語のメモや紙片はほとんど見られない。年代は十八世紀のものが多い。一束に同年の文書がまとまっている場合と、様々な年のものが一括されている場合がある。

A8 一紙類が六括にまとめられていた。ほとんどが、藩士が組ごとに連名署判をして、キリシタン禁制を遵守することと、家内全員の踏絵を済ませ、寺請証文を取ってあることを誓約する「切支丹宗門御改に付御書物之事」で、特定の年のものが一束になっている場合が多い。六括の

最も特徴的なのは、正保三(一六四六)年「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組書物之事」の一括である。これは白杵藩が同年に作成させた、五人組ごとの証文であり、檀那寺による寺請の文言が上部に添付されたものの約一〇〇通がまとめられていた。⁽¹⁴⁾

A6 一紙あるいは一紙を貼継いだものが七括になっていた。ほとんどすべてが、寛永一二年に各家ごとに作成された、「き



写真4 文書・簿冊の綴り (A10)

うち一括は、同表題で各寺院の住持によるものである。マレガ番号は付されているが、マレガ氏のメモがあるのは、一部のみである。
A9 新聞に包まれた一括 (A9.1) と紙箱 (A9.2) が一つの袋にまとめられ、それぞれが二〇ほどに分けられていた。A9.1の一括以外には、マレガ番号が付されている。家中及び村方の、類族の生死出入覚、類族御通、死亡・出生の届、出家・他出など移動の伺い、寺の「切支丹宗門御改ニ付御書物之事」、また宗門方役人の業務に関わる書状なども含む。
A10 主に縦帳を集めた三括からなる。元禄四(一六九一)年藩士各家の男女上下の人数を書いた「覚」を貼り継ぎ、さらに集計した「宗門御改に付家人人数之覚」の簿冊と一緒に綴じ合わせたものがひとかたまりとなっていた(写真4)。また同様の簿冊「家人人数附」を綴り合わせたものもある。これらは撮影のために解綴された。天保九(一八三八)年の「宗門御改ニ付毎月仕上五人組御書物」という村組単位で出す縦帳

の右側の綴り部分を切断したものが、数十冊見られた。月毎の記録を一年分取りまとめた後不要になり、再利用のため切断したと推測される。一部は習字の練習等に利用した形跡もある。それらにも丹念にマレガ番号が記されていた。
A11 新聞紙に包まれた二括。一つは「御書物之事」の表題を持つ、類族の死亡に際して出された届書の一括で、五人組・弁指・庄屋連印の一通と檀那寺に



写真5 藩庁の文書管理袋 (A12)

よる一通が重ねて巻かれていることが多い。もう一括は、「類族御通」の表書を持つ包紙に類族の生死出入等を書き連ねる横折数丁をこよりで留めたもの、書状類や類族改帳などの縦帳類の一綴りなどを含む。
A12 藩庁で文書管理に用いていたものと思われる和紙の袋七袋からなり、表面には享保期(一七一六〜一七三六)の半年または一年の「類族失書付」、「類族出生書付」であることが書かれている。(写真5) マレガ番号は袋にのみ記され、マレガ氏が点数を数えた痕跡が残るが、個々の文書には番号もメモの記入や挿入もない。
A13 新聞紙で包まれた一紙文書七括と、冊子一七冊を含む。一紙文書の多くは、二通組の類族死亡届の「御書物之事」で、同年のもの束と、年代がばらばらな束がある。土地売買や借用の証文もいくらか含まれている。一紙文書にはマレガ番号もメモ等の記入、挿入もない。冊子のうち武鑑など一部にマレガ氏のメモが見られる。
A14 新聞紙等で包まれた五括。マレガ番号が付けられ、各括にリストやメモが付されているが、内容は雑多で、水損の甚だしいもの、断簡、冊子から外れた丁の寄せ集めなどもみられる。
A15 藩庁の袋にはいった五括。元禄期(一六八八〜一七〇四)及び享保期の「類族出生」書付との表書きを持つ。A12と同様マレガ番号は袋にのみ記されている。

A 16 新聞紙や包み紙、紐で束ねられた九括。内容、形状は括により異なり年代も多様である。多くにマレガ氏によるメモやリストなどが付されている。この中に、マレガ氏による目録のノートが入っていた。

A 17 新聞紙及び包み紙で包まれた三括。多くが、天保期（一八三〇～一八四四）の「切支丹宗門御改ニ付毎月仕上御書物之事」「宗門御改ニ付毎月仕上五人組御書物」などの堅帳と一紙の綴りからなる。

A 18 冊子の一括で、「親鸞聖人御旧蹟二十四輩順拝図会」「都名所図会」からなる。

A 19 藩庁の文書袋三袋からなる。内容は、正徳三～四（一七一三～一七二一）年、享保六（一七二一）年の「類族死失」、享保三～四（一七一八～一七一九）年の類族婚儀・所替、養子・離別・剃髪、奉公、引越等に関わる届書類であった。

A 20 藩庁の文書袋三袋からなる。内容はA 19と類似の届書類であった。

A 21 一紙類に加え、新聞の切り抜き、書籍など雑多な近代文書を含む。

（4）史料の出所とマレガ氏による整理

上記の略述からも明らかのように、マレガ氏蒐集文書の大半は、白杵藩の藩庁に保存されていた文書が流出したものであり、一部は藩庁における保存形態をとどめている。マレガ氏は、大分に赴任した一九三二年から一九三八年ごろまでに、主要部分を蒐集したという¹⁷。他に、少なくとも、竹田（岡）藩、府内藩、佐伯藩の史料が若干入っていることが確認されるが、マレガ番号付与に際しては、別扱いはされていない。大分市のハレルヤ書店からの購入、郷土史家元山元造からの入手を示すメモや値札が残っており、古書店をめぐり、あるいは人脈を駆使してさらに文書を探索していたことがうかがい知れる。

一九五三年にバチカン図書館へ送られた際の梱包は、「未加工木製長持」「メッキ内装の長持」「木箱」の三個であったという。「木箱」にはメツ

キの小箱2つが収められ、そこにマレガ氏の著作に関わる文書が入っていたとされる。それがA 1、A 2に相当することは間違いないであろう。

一方、「未加工木製長持」にはすでに目録作成の済んだ文書が入っているとされる。ほぼすべての文書にマレガ番号の付されていたA 5～A 11、A 14、A 16～17はこの箱に入っていたと推測される。その目録に当たるのが、A1644として発見された、マレガ氏自筆の目録（Catalog）のノートである²⁰。この目録は、表紙に一九三八年と記されている。マレガ氏の付与した番号1～1000、M（1000を意味する）1～1000、B（2000を意味する）1～941、すなわち二九四一件の番号が一行ずつに記され、その多くには、イタリア語、ローマ字、一部は漢字も加えて、文書の内容や年代についての情報が付記されている。

「メッキ内装の長持」には目録作成の済んでいない文書が入っているが、すべての文書は袋に収納されており、袋に内容が記載されているという。目録作成＝マレガ番号の付与済みという点からみれば、番号のないA 3、A 4、A 13、A 20、A 21がこの箱に入っていたことになる。袋に収納されている状況が記述と合致するA 12、15、19については、袋毎にマレガ番号が付されているが、これらは目録作成済みとみなされたかどうか、疑問が残る。

番号付与の順序、各袋に収納されたまとまりとその相互関係については、さらに検討が必要である。

おわりに

以上、マリオ・マレガ氏蒐集文書についてごく大まかな全体像を示した。「キリシタン史料」と称されることの多い本史料群であるが、その実態は、近世全般にわたる白杵藩のキリシタン禁制実施状況に関わる史料と位置付けるべきであろう。マレガ氏にとっては、「転び」や「類族」

が出てこない史料は、「史料集に使えない」との認識された。藩庁からの史料を入手するにあたって、そうした取捨選択が働いた可能性も否定できない。それでも、宗門改め・絵踏の実態に加え、藩の宗門方の文書作成・保管や文書管理のしくみ、家中の人的構成等、藩政の一端を知ることのできる史料であることは間違いない。さらに、同じ書式また同じ年に提出された史料がかなりまとまって保存されていることで、白杵藩領全体についての様々な視点からの分析が可能となる。

概要調査はようやくほぼ終了し、各袋について担当者を決め一点毎の目録作成と袋ごとの史料概要記述が始まったところであり、本格的な内容検討はこれからの課題である。キリシタン史、藩政史、地域史といった幅広い研究の発展が期待される。そして調査プロジェクトの遂行そのものが、国内外の諸機関の研究者や修復専門家にとって、それぞれの経験・方法について相互理解を深める場となり、次の世代にも続く人の出会いと交流のきっかけとなることを願いたい。

〔注〕

- (1) マレガ氏の伝記、日本での活動及び文書蒐集の経緯とその背景については、シルヴィオ・ヴィータ「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父―マレガ文書群の成立過程とその背景」(『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第二号(二〇一六年三月)(以下『国文研紀要』12)を参照。マレガ氏の蒐集品としては他に、日本に関する木版本・写本・錦絵などが若干の文書とともにローマのサレジオ大学に存在し、文書は近頃バチカン図書館に寄託された。書籍については国文学研究資料館文献資料部編「サレジオ大学マリオ・マレガ文庫所蔵日本書籍目録」(『調査研究報告』二三号 二〇〇二年一月)がある。
- (2) 『豊後切支丹史料』(サレジオ会 一九四二年 以下『正編』・『続豊後切支丹史料』(ドン・ボスコ社、一九四六年 以下『続編』)。

(3) 溝部氏のマレガ文書探索は、別府大学図書館報『アルゴノート』一三〇一六号に「イタリア紀行」1、4として連載されている(一九八四、一九八五)。

(4) 人間文化研究機構は、日本関連在外資料調査事業の一課題として「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査研究」(代表・国文学研究資料館 大友一雄)を位置づけ、二〇一三年一月にバチカン図書館と協定を締結した。東京大学史料編纂所及び大分県教育委員会(先哲史料館)は、それぞれ同機構と研究協力の覚書を交わした(二〇一四年二月)。

(5) 『豊後切支丹史料』及びその原文書の史料学的研究」(二〇一四―一五年度)、「ヴァチカン図書館所蔵マリオ・マレガ氏蒐集史料の総合的研究」(二〇一六年度)。

(6) 調査は未だ進行中であり、史料の詳細については今後作成される一点毎の史料目録を待たねばならない。本稿は、松井洋子「マレガ神父収集文書群の魅力を保存し伝える―調査方法と進捗状況の紹介―」(マレガ・プロジェクト)シンポジウムで白杵「バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後切支丹文書群の魅力」予稿集(二〇一四年一月)にそれ以降の情報をお断りしておく。文責はすべて筆者にあるが、史料についての情報はプロジェクトに参加した研究者各位の共同作業の成果である。

(7) 大友一雄「バチカン図書館所蔵豊後キリシタン史料群とマリオ・マレガ神父」(『歴史と地理 日本史の研究』二四八号 二〇一五年三月)五一頁。

(8) アンヘラ・ヌーニェス・ガイタン「マレガ神父収集文書の整理と保存」(『国文研紀要』12 二〇一六年三月)一七三頁。

(9) 撮影のために最低限必要な解綴・修復等の作業は、日本側の修復専門家による研修を経た同館修復室の専門家がこなしている。ヌーニェス・ガイタン二〇一六、一七五―一七九頁。

(10) スタンプは、カタカナの名前の表記が「マレーガ」と「マレガ・マリオ」の少なくとも二種がある。同じスタンプは書籍にも押されていたようで、

注1前掲の書籍目録にも写真がある。

- (11) 『正編』の手沢本は、一九五四年に教皇庁宛に送付され、(ヴィータ二〇一六、一六三頁)、図書館の所蔵史料として別置されていたが、本文書の発見に伴いこのA1に同梱されることになったものであり、図書としての番号が貼り付けられている。



番号を記したスタンプ2種

- (12) 今村孝次(昭和実践女学校長)、高山英明(元大分市長)などの名がみえる。

- (13) A11730。マレガ・プロジェクトでは、京都外国語大学のシルヴィオ・ヴィータ氏をはじめ、現地に参加するイタリア人の日本研究者、イタリア史の若手研究者等の協力を得、イタリア語メモの解説にも取り組んでいる。翻訳についてはこれらの方々から協力を受けた。

- (14) 正保三年の五人組再編については、佐藤晃洋「マレガ文書にみる臼杵藩キリシタン禁制政策開始期の文書」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二六号 二〇一六年三月)、同「近世日本豊後のキリシタン禁制と民衆統制」(『国文研究』12 二〇一六年三月) 佐藤晃洋・大津祐司「マレガ・プロジェクトに係る平成二六年度概要調査」(大分県立先哲史料館『史料館研究紀要』二〇号 二〇一六年一月)を参照。

- (15) 寛永一二年の宗門改めについては注14の各論文を参照。

- (16) 類族の死亡届については、佐藤晃洋「臼杵藩におけるキリシタン禁制政策確立後の文書」(『大分県地方史』二二七号 二〇一六年三月)を参照。
(17) 入手の時期・経路についてはヴィータ二〇一六(一五九―一六五頁)を参照。仲介した古物商等については未詳の点も多い。

- (18) 佐藤晃洋「マレガ・プロジェクトに係る平成二五年度概要調査」(大分県立先哲史料館『史料館研究紀要』一九号 二〇一五年一月)

- (19) この送付の記録は、デリオ・ヴァニア・プロヴェールピオ「バチカン

図書館所蔵マレガ文書について」(『マレガ・プロジェクト』シンポジウム『臼杵』バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後切支丹文書群の魅力』予稿集 二〇一四年一月)に紹介され、大友二〇一五にも引用・検討されている。用語が若干異なるが、ここではヴィータ二〇一六(一六二頁)の訳に従う。

- (20) この目録は二〇一五年九月にA16の概要調査を行なう過程で発見された。ヴィータ二〇一六に若干の言及があるが、全面的検討は今後の課題である。

〔付記〕

本稿は、二〇一四―一五年度東京大学史料編纂所・特定共同研究「『豊後切支丹史料』及びその原文書の史料学的研究」(研究代表者 松井洋子)及び人間文化研究機構日本関連在外資料調査研究「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査研究(マレガ・プロジェクト)」(研究代表者 国文学研究資料館・大友一雄)による研究成果の一部である。

なお、写真はすべてマレガ・プロジェクトより提供を受けた。